

令和4年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名 浪速区

学 校 名 大阪市立栄小学校

学校長名 島田 武

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・学校では、第6学年 40名

令和4年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語では、学習指導要領の内容において、全国平均正答率に到達できなかった。特に、本校の平均正答率及び無回答率の状況と、学習指導要領の内容の相関関係を加味すると、「我が国の言語文化に関する事項」「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域における思考力・判断力に課題がある。

算数では、学習指導要領の領域において、全国平均正答率に到達できなかった。特に、本校の平均正答率及び無回答率の状況と、学習指導要領の領域の相関関係を加味すると、「図形」「データの活用」の領域の系統性をふまえた見方・考え方に課題がある。

理科では、学習指導要領の領域において、全国平均正答率に到達できなかった。特に、本校の平均正答率及び無回答率の状況と、学習指導要領の領域の相関関係を加味すると、各領域の系統性をふまえた見方・考え方に課題がある。

児童質問紙においては、「自己有用感」「達成感」「主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する取組」については、肯定的な回答が多く全国平均を大きく上回る結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

本校は、これまで、人権・自治・自立をキーワードに栄小学校への愛着や所属感、自己のアイデンティティを大切にした教育を推進するとともに、『個別最適化した学びの育成』をめざし、子ども一人ひとりの状況に応じた学力向上等の取組を推進している。課題解決に向けて、自分で考え自分から意欲的に学びに向かうことができる児童の割合が高くなった。

〔国語〕

本校の中央値は全国の中央値より2問届かなかった。特に、「我が国の言語文化に関する事項」「読むこと」に課題があり、二極化の傾向にある。具体的には、テキストに書かれたことを「理解・評価」（解釈・熟考）することや、テキストに基づいて自分の意見を論じたり、テキストを「活用」したりすること等の読解力に課題がある。また、言葉の特徴や使い方にに関する事項に関わって漢字を正しく書くことに課題がある。

〔算数〕

本校の中央値は全国の中央値より2問届かなかった。本校児童の課題は、「図形の意味や性質をもとに図形の構成の仕方を考察する力」「二つの数量関係について考察する力」に課題があり二極化の傾向にある。具体的には、図形の意味や性質をもとに、辺の長さや角の大きさに着目し、図形の構成の仕方について考察できるようにすることである。また、問題の場面の数量関係に着目し、基準量、比較量、割合の関係等の数量関係について考察し、数学的に表現・処理することに課題がある。

〔理科〕

本校の中央値は全国の中央値より3問届かなかった。エネルギーや粒子の領域に関わって、自然の事物・現象の系統性を理解し、科学的なものの見方や考え方をはたかせながら考察する力に課題があり、二極化の傾向にある。自然の事物・現象から得た情報を、他者と差異点や共通点に基づいて、分析して、解釈し、自らの考えを整理することに課題がある。

質問紙調査より

本校は、教育目標を「自他を大切にし、夢と希望の実現に向かって取り組む子どもを育てる」と掲げ、これまで取り組みを推進し、児童が互いに声をかけ合い、学校の仲間として認め合えるように、たてわり活動や異学年交流を図っている。また、人権教育をSDGsの視点と関連付けながら進めるために、教科・領域の学習を横断的・総合的に取り組む年間指導計画を作成するとともに、必要に応じて地域の施設を活用したり、人材を招いたりして、児童が主体的に取り組めるようにし、学習したことを学校全体に広める取組の充実を図っている。その結果、「自分には、よいところがあると思いますか」「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしなが、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりする活動を行っていましたか」等、自己有効感や主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する取組状況については、本校は大変良好な状態である。

今後の取組(アクションプラン)

『個別最適化した学びの育成』をめざし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習の基盤となる問題発見・解決能力、情報活用能力、言語能力の3つの資質・能力を育む。加えて、ICT機器の効果的な活用をしながら、問題発見・解決のプロセスにおける学びの充実を図る。

◆読解力向上に向けた取組

「読み取る力を身に付け、自ら学び、課題解決する児童」の育成をめざし、読解力向上のための指導過程や指導方法の工夫、適切な言語活動の充実について取組を進める。また、教科横断的な言語能力を基軸にした情報活用能力の育成を図る必要があり、「情報収集、整理、分析、表現、発信の理解」「情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解」と言語活動を総合的、系統的に整理した各教科の見方・考え方を働かせた授業改善を行う。

◆国語・算数の基礎・基本の学習内容の定着と個別最適化した学びに向けた授業改善

算数及び国語の基礎・基本となる「数と計算」「図形」「言葉の特徴や使い方にに関する事項」においては、各学年に応じた定着を図ることが課題であり、習熟度別・課題別指導等の学習形態の工夫を図り、系統立てた継続的な取組を行う。加えて、ザクザクタイムの充実と、読書タイムなどの業間の時間、放課後学習の時間を適切に活用し、国語・算数の基礎・基本となる学習内容の定着を図る。